

# フッサールの『イデーⅡ』における人格の構成について

Über die Konstitution der Person in Husserls "Ideen II"

石田三千雄

Michio ISHIDA

## はじめに

われわれはこの論文で、フッサールの『イデーⅡ』における人格(人格的自我)の構成について論じる。人格は重層構造をもつ人間であり、身体を有し心(Seele)として存在しながら、高次の精神活動を営むものである<sup>1)</sup>。このような人格を『イデーⅡ』に即して現象学的に解明することがわれわれの目的である。

フッサールは『イデーⅠ』で「基本的な方法論的諸考察と純粹意識の分析」を提出した後に、『イデーⅡ』で「意識による諸対象の構成の問題」を扱っている。『イデーⅡ』はマリー・ビーメルによれば、1912年から1928年頃まで、フッサール自身によって何度も書き直された草稿から成っている。マリー・ビーメルは、その過程で「あらゆる実在性の構成を解明すること」が「現象学の本来の課題」となったことに注意している<sup>2)</sup>。フッサールは『イデーⅠ』の149節から153節で「領域的存在論」と「現象学的構成の問題」を論じ、『イデーⅡ』の内容の予告を行っている。そこでフッサールによって確認されていることは、現象学的構成においては「いかなる対象の領域も意識と相即して構成される」(III/1, 344)ということである。構成の研究は、「原本的に経験する意識の枠内における事物構成の種々の段階と層」によって本質的に規定されている(III/1, 352)。しかし、そこには「種々異なった領域の絡み合い(Verflochtenheit)」というきわめて困難な問題がある。しかも、種々異なった領域は、構成的意識形態の側での絡み合いを条件づけている(III/1, 354)。

フッサールの『イデーⅡ』は、物質的自然(materielle Natur)、有心的[動物的]自然(animalische Natur)、精神的世界(geistige Welt)という三つの領域の構成、しかもそのような領域として重層的に構築される存在者の層の構成を扱っている。これら三つの領域には、それぞれ物質的自然を研究する科学、生物学および自然科学的心理学(精神物理学)、精神科学が対応している。そしてそれらの領域には、それぞれの領域の構成を提示するための手引きを与える領域的な根本概念として、物質的自然については事物、単なる事象、有心的自然については、心をもった身体物的存在者、精神的世界については人格的自我としての精神という概念がある。その場合、物質的自然および有心的自然の出来事を結合する根本法則が因果性であるのに対して、精神的世界を支配するのは動機づけの法則である<sup>3)</sup>。

『イデーⅡ』の領域構成には幾つかの問題点がある。それは領域構成の区分や「基づけ」(Fundierung)に関わる問題と、領域を支配する因果性と動機づけの関係の問題である。

領域構成の区分という点に関して、『イデーⅡ』の中で「事物、心、精神」という三領域と「自

然と精神」という二領域が混淆しているのが見られる。ゾンマーによれば、この三分法は「物理的なもの対心理的なもの」と「自然対精神」が互いの中に押し込められることによって生じている。このような分類問題は、まず単純にテキスト編集上の問題に関連している。二つの分類に関係する元になった草稿は異なるのである。すなわち、物理的事物と心を吹き込まれた身体の構成を扱った草稿が『イデー II』の第一篇と第二篇にまとめられ、自然と精神を扱った草稿が第三篇としてまとめられたのである<sup>4)</sup>。これに対して、ラントグレーベは、『イデー II』での「物質的自然と有心的自然と精神的世界」の三肢的構造が問題になっているように見えるが、実際には自然と精神という二肢性が、しかも精神が優位をもつ自然の世界と精神の世界が問題になっていると考える<sup>5)</sup>。

次に基づけに関して、『イデー II』の領域構成は、物質的自然を世界の構成の最下層として、心的なものや人格的なものをその上に基づけられた層と考えるような、存在者の諸領域の単純な基づけを論じているわけではない。このように物質的自然に構成上の優位を認めることは、自然主義的態度に立って「自然の不当な絶対化」に導くことになる。ラントグレーベも言うように、諸領域といっても、単純に一方が他方の上に構築されている諸存在層が問題なのではなく、むしろ諸存在層は互いに浸透し合っているのである。例えば、すでに物質的な事物の構成を考えるだけで、物質的な事物という基づける基底層として示されるものが、知覚する身体のキネステゼ的な運動と分離しがたく相関していることがわかり、物質的なものの上に構築される身体として現出するものが、逆に、物質的な事物が存在するための条件であることが証示される。こうして物質的な事物と有心的な存在者という領域は浸透し合っているのであり、ここには一方的な基づけ関係があるのではなく、物質性や有心的な存在者の領域を語ることに意味を与える相関という関係がある。特に一方的な基づけについてまったく語るができなくなるのは、すべての存在者の最下層と思われた、空間的に延長した事物、客観的に規定可能な延長物の総体としての自然が、相互にコミュニケーションする主観どうしの世界における形成体、つまり絶対的なものとしての精神の形成体であることが明らかになるときである。何故なら、自然という相対的な存在は絶対的なものである精神を基づけることは不可能であるからである<sup>6)</sup>。

『イデー II』の領域構成は、一見すると物質的自然と有心的自然を因果性によって解明し、精神的世界を動機づけによって解明しているように見えるが、動機づけは精神という領域のみに関係づけられるテーマではない。動機づけは、ヘルトが述べるように、現象学の構成研究全体を導いているのである。対象は、そのつどの多様な与えられ方を越えた存立をもつような何か、その意味でこの多様を超越する何かとして私と出会う。しかし対象を超越的と捉えることは根拠をもたねばならず、それは主観的な状況に依存する現出のはたらきによってのみ動機づけられることができる。さまざまな種類の対象におけるこうした動機づけの分析によって、構成の研究の普遍的な課題が表されている<sup>7)</sup>。またラングによれば、動機づけの概念は、フッサールにおいては、人間の実践の理論にのみ属するのではなく、また実践的な振る舞いの運動根拠にのみ関わるのではなく、「理由-帰結」(Weil-So)によって分節化される純粹に現象学的な圏域における一切の関係を包括する<sup>8)</sup>。

さらに『イデー II』の構成研究の位置づけの問題がある。ゾンマーが指摘するように、自然主義的態度と人格主義的態度が構成研究のテーマとなっている点では、『イデー II』の構成研究は現象

学的態度に立っており、超越論的現象学の一部と言えそうである。しかし、還元なしに人格がその周囲世界においてすでにもっているにちがいない知だけを説明する限り、『イデーニ II』の構成研究は内世界的現象学にとどまっていると考えられる<sup>9)</sup>。ラングによれば、『イデーニ II』の本来のテーマは、自然的態度の主観が自分自身にいかにして、またどのようなものとして現出するかという問題である<sup>10)</sup>。けれども、人格主義的態度でなされた分析と記述もすでに超越論的現象学の成果を踏まえている。新田義弘氏によれば、フッサールの「精神」の存在領域構成論は、自然的態度の超越論的説明の意義を含んでいるものとみなさなければならない<sup>11)</sup>。

以上の諸点を考慮に入れつつ、われわれは以下のように論じる。われわれはまず、人格は純粹自我を核にもつ実在的自我であること、人格は人格主義的態度で把握される人間であること、そして人格は周囲世界の主観であることを論じる。その際、人格は周囲世界の中で他者に出会い、他者と社会的に結合し、コミュニケーションし合い、相互に影響し合うことが明らかとなる(以上第1章)。次に、人格が「私はできる」(ich kann)に基づく能力の主観であることを論じる。ここで人格は連合や理性の動機づけおよび習慣に従う理性作用の主観であることが明らかとなる。また人格の「私はできる」は実践的可能性として可能な行為を含むこと、および人格は典型的な様式をもつことが明らかとなる(以上第2章)。最後に、人格を「自然と精神」の関連の中に位置づけ、精神としての人格が心と身体という自然側面をもつことを論じる。ここで人格が重層構造をもつ精神であることが判明する。そしてさらに、自然と精神の根源的な相関によって、人格(精神)の身体性と感情に独自の意味が認められることになる(以上第3章)。

## 1. 人格の構成

フッサールは『イデーニ II』の第三篇「精神的世界の構成」で、「人格主義的態度」(personalistische Einstellung)とそれによって把握される「人格」(Person, Persönlichkeit)としての精神、およびその人格が存在する「精神的世界」を論じている。フッサールの人格の構成論の特徴は、純粹自我を人格の核に置き、その上で人格の基盤に身体と心を位置づけ(人格の自然側面)、心と精神を区別し、人格の重層構造を把握していることにある。それは倫理的な意味での人格の基盤を説明するという意味をもつであろう。しかし、本稿の叙述の順序では、人格の重層構造は最後に明らかとなる。

『イデーニ II』でフッサールが考察する「人格」は、「人、人物」という意味、心と身体をもった自我(人間-自我)という意味、さらに倫理的な意味での行為の主体という幅広い意味をもっている。しかし、人格はあくまで実在性である。それは現象学的には構成された統一体である。ただし、人格の実在性は、事物の実在性とは異なる独特の実在性である。もし人格の実在性を事物の実在性と同じように考えるとすれば、人格は事物(物件)ということになる。フッサールは純粹自我が純粹意識の体験経過(発達経過)の中で人格的自我という統覚的形態を受け取ると考える。この体験経過の中で、純粹自我は明示や充実を見出す多種多様な志向性の核となっている。人格的自我は、その核が純粹自我である、固有の態度決定・習慣・能力から形成される統一体である(IV, 251, 265)。

## 1.1 人格と純粋自我

「純粋自我」は、われわれが現象学的還元を遂行するとき、いかなる排去にも従わない、究極の主観、現象学的主観、しかもすべての形相的に現象学的な研究の主観である(IV, 174)。この純粋自我は自己知覚、反省の中で把握される。フッサールは純粋自我について、作用との関連で次のように述べる。私が私自身を純粋に、知覚する際には知覚されたものに、認識する際には認識されたものに、空想の際には空想されたものに、論理的思惟の際には思惟されたものに、価値評価の際には価値評価されたものに、そして意欲する際には意欲されたものに向かっていると捉える場合に、その私自身を私は純粋自我と捉えるのである。純粋自我はこれらの多様な作用を行っている際も、分割されておらず、数的に同一にとどまる自我である(IV, 97-98)。純粋自我は、コギトという作用において、主観と客観という両極性に関して、客観という極に対する主観の側の自我極(Ichpol)として存在する。この純粋自我は、同じ意識流に属するすべての作用の中で機能している同一の主観であり、あらゆる意識生活の放射中心と入射中心である。この意識生活は、あらゆる触発と作用、あらゆる注意や把握や関係づけや結合、そしてまたあらゆる理論的、価値評価的、実践的な態度決定、さらにあらゆる喜びと悲しみ、希望と恐れ、能動と受動などの諸作用から成る。これらの諸作用はいずれも自我点をそれぞれの必然的な起点(*terminus a quo*)としている。その際、客観へ向かう光線と客観から返ってくる光線という二重の光線がある。中心から作用を通して客観へ向かう光線と、客観から中心へ再び回帰する光線が、さまざまに変化する現象学的諸特性のうちに見出される(IV, 105)。

純粋自我は、実在的な人格としての自我や実在的な人間の実在的な主観ではない。純粋自我は、素質や能力や素因をもたない。それは内容をもたず単純なものである。純粋自我は志向性の中心であり、自我や人間や人格を構成する志向性を遂行している。この純粋自我にとってはあらゆるものが周囲世界となる。全世界が純粋自我である私の周囲世界である。人間としての私もこの純粋自我の実在的な周囲世界の構成要素である(IV, 104-105, 109-110)。

純粋自我に対しては、人格は実在的な自我(*das reale Ich*)ということになるが、この両者はどのような関係にあるのであろうか。フッサールによれば、自我ないし人間を統覚している各純粋自我はそれぞれ、人間-自我(*Menschen-Ich*)や人格(*Persönlichkeit*)を自分を取り巻く客観としてもっている。他方、人間や人格という対象が、統握意味—これによって実在的な自我は純粋自我を統覚の中核的な内実として含む—と共に措定されている限り、純粋自我は自分自身を人間および人格に内在する純粋自我としても見出す(IV, 110)。人格を「自然に態度をとっている自我」に、純粋自我を超越論的自我に置き換えるならば、この困難な事態はラングに従って、次のように解釈することができるであろう。自然的に態度をとった自我は、超越論的自我自身である。この超越論的自我自身はエポケーの中で自然に態度をとった自我として主題化される。超越論的自我が自然的に態度をとっている限り、超越論的自我は自らを超越論的なものとして反省することなく、超越論的にのみ機能しているにすぎない。超越論的自我は、第一にそのつど私の自我であり、したがって第二にそれ自身自然的な態度をとっていることができる<sup>12)</sup>。

## 1.2 自然主義的態度と人格主義的態度

人格は人格主義的態度(もしくは人格的態度 *personale Einstellung*)あるいは精神科学的態度(*geisteswissenschaftliche Einstellung*) (もしくは精神的態度 *geistige Einstellung*)において把握される人間である。人格的態度の中でのみ、活動的な人格と影響を受ける人格は、動機づけの主観および周囲世界の主観として措定されている(IV, 260)。人格主義的態度は自然主義的態度の転換によって生じる。フッサールによれば、自然主義的態度は、抽象によって、つまり人格的自我の一種の自己忘却によって自立性を獲得するのであり、そのことによって自然主義的態度は自然を不当に絶対化する。自然主義的態度と人格主義的態度は同等ではなく、人格主義的態度に従属する<sup>13)</sup>(IV, 183-184)。

自然主義的態度(*naturalistische Einstellung*)あるいは自然界に向かう態度(*naturale Einstellung*)は、自然科学的に直観し思惟する主観がとる理論的態度であり、この態度で研究される対象は自然科学の意味での自然である。自然科学の意味での自然は「単なる諸事象の圏域」(*Sphäre bloßer Sachen*)であり、この圏域は価値述語や実践的述語と無縁である。この純粋な理論的態度においては、われわれは家屋、机、街路、芸術作品などは経験せず、もっぱら物質的な事物(*materielle Dinge*)だけを経験する。価値のある事物についても空間・時間的な物質性の層だけを、そしてまた人間と人間社会についても同様に、空間・時間的な身体と結合した心的な自然の層だけを経験するのである(IV, 2, 25)。

人格主義的態度は、われわれが日常的に生活しているときの態度であり、「特別の補助手段によってはじめて獲得され、認められるにちがいないであろうような人為的な態度」(IV, 183)ではないが故に、「自然的態度」(*natürliche Einstellung*)とも呼ばれる<sup>14)</sup>。人格主義的態度は、「われわれが互いに一緒に生活し、互いに語りかけ、互いに挨拶で手を差し出し、愛と嫌悪、信念と行い、語りかけと応答の中で互いに関係づけられている場合、われわれがその中にいつでもいる」(IV, 183)態度である。

この人格主義的態度は『イデーⅠ』での「自然的態度」に対応する。『イデーⅠ』でフッサールは自然的態度を次のように記述している。自然的態度に生きる人間は、「自然に生活を行っている人間」(*Menschen des natürlichen Lebens*)であり、表象したり、判断したり、感じたり、意欲したりしている。私は一つの世界を意識している。つまり、空間の中で果てしなく拡がり、時間の中で果てしなく生成しつつあり、また生成してきた一つの世界を意識している。私がこのような世界を意識するということは、何よりもまず私とその世界を直接直観的に眼前に見出し、その世界を経験するということを意味する(III/1, 56)。私は目覚めた意識においてはつねに、そして変更不可能な仕方で同一の世界—内容の上では変動するが—に関係しているのを見出す。この世界は、絶えず私にとっては眼前にあり、そして私自身がその世界の成員である。その際、この世界は私にとって、一つの単なる事象世界として現にそこに存在しているのではなく、同じ直接性において価値世界、財貨の世界、実践的世界として現にそこに存在している。私の眼前の諸事物は、事象としての諸性状を備えているのと同様に、価値の諸性格をも備え、つまり美しいとか醜い、気に入るとか気に入らない、快適とか不快なとかといった価値の諸性格を備えているのを、私は見出す(III/1, 58)。『イデーⅠ』は自然的態度の世界を、さらに私の自然的な周囲世界、相互主観的な自然的周囲世界として記述している。

しかし、『イデーⅠ』の自然的態度は、現象学的還元以前の素朴な態度であるのに対して『イデー

ーン II』の人格主義的態度は、現象学的還元によって得られた現象学的態度を踏まえた上での態度である。『イデー ン II』の構成的研究は、自然的態度で行われていても、現象学的還元以前の自然的態度による研究ではないであろう。このため、フッサールは『イデー ン II』の中で行われる分析が「純粹に現象学的な分析」であることにしばしば注意を促し、現象学的還元の効用を述べる(IV, 173-174)。『イデー ン I』での自然的態度は、自然主義的態度と区別されていない。『イデー ン II』は、『イデー ン I』での自然的態度から、自然主義的態度・自然界に向かう態度を取り出し、この態度の制限を明らかにした。フッサールによれば、現象学的還元は、われわれを自然的態度[適切には、自然主義的態度一筆者]の意味の制限から解放する。現象学的還元によって、自然的態度が唯一可能な態度ではなく、自然界に向かう態度は単に相対的で制限された存在の相関者と意味の相関者のみを構成することがわかる(IV, 179)。『イデー ン II』においては、ゾンマーが言うように、自然的態度が自然主義的態度と人格主義的態度に具体化されている<sup>15)</sup>。

『イデー ン II』の人格主義的態度は単なる日常生活の人間の自然な態度にすぎないのではない。人格主義的態度が「精神科学的態度」である限り、人格的主義的態度は精神科学の学問的態度でもある。したがって、『イデー ン II』の人格主義的態度は、日常生活の態度と精神科学の学問的態度という二義性を帯びている。自然主義的態度では、われわれが生活している世界は十分に主題化されない<sup>16)</sup>。自然主義的態度が世界のうちに自然と自然対象しか見ないという制限された態度であるのに対して、人格主義的態度(精神科学的態度)は人格主義的態度で把握される精神的世界の中に、自然と自然的対象を位置づけることができる。実際、『イデー ン II』の第三篇における精神的世界の構成は、自然主義的態度で物質的自然と有心的自然を構成した後に、それらの構成で得られた成果を人格主義的態度で把握し直すというやり方を取っている。この限りでは自然主義的態度に対する人格主義的態度の優位は明らかである。しかし、それにとどまらずに、さらにフッサールは、『イデー ン II』の62節で人格主義的態度と自然主義的態度の相互浸透を説き、自然と精神という二つの種類の実在性が互いに関係し合うことを述べている。これについては本稿の第3章で扱う。

### 1.3 人格と周囲世界

人格主義的態度において、われわれはわれわれを取り巻いている事物をまさにわれわれの周囲環境(Umgebung)とみなし、自然科学においてのように「客観的」自然とはみなさない(IV 183)。フッサールは、「人格として生きること」(als Person leben)を、「自分を周囲世界に対して意識的な関係のうちで見出すこと、そしてその関係にもたらしこと」(IV,183)、と捉える。人格としての私は、或る周囲世界の主観としてあるがままのものである。自我と周囲世界という概念は不可分に互いに関係づけられている(IV,185)。こうして周囲世界はまず第一に世界「自体」ではなく、「私に対する」世界である。それは、まさにその自我主観の周囲世界、自我主観によって経験された、あるいはその他の仕方意識され、そのつどの意味内実を含んだその志向的体験の中で措定された世界である(IV, 186)。フッサールはそのような周囲世界を「生成する周囲世界」として捉える。周囲世界は何らかの仕方いつでも生成(Werden)の中にあり、帰属する措定と抹消することを伴った意味変化といつでも新

しい意味形成とを通じて絶えざる自己産出(Sicherzeugen)のうちにある(IV 186)。そしてそれと相関的に人格的自我は発達する自我と捉えられる。

フッサールは周囲世界と人格(人格的自我)について次のように述べる。「周囲世界は、人格によって人格の作用の中で知覚され、想起され、思考によって捉えられ、あれこれのことによって推測されたり推論された世界である」。そして「この人格的自我はその世界を意識し、その世界はこの人格的自我に対して現存し、その世界に対して人格的自我はしかじかに振る舞う。例えば、人格的自我に現出する諸事物に関して主題的に経験しつつ、理論化しつつ、あるいは感じつつ、価値評価しつつ、行為しつつ、技術的に形成しつつ振る舞う」(IV, 185)。このように周囲世界の中で人格的自我はさまざまに振る舞うが、それは周囲世界の中の事物が人格的自我に何らかの刺激を与え、それに応える形で人格的自我がさまざまな作用を行使して振る舞うということである。

この点をもう少し詳しく見ておこう。ここで「事物統一体(ノエマ的な統一体)」が多かれ少なかれ「強い」諸傾向の出発点となっている。すでに意識されてはいるが、まだ把握されていない(意識背景の中で浮かび上がる)ものとして、事物統一体は主観を自分に引きつけ、そして十分な「刺激の強さ」において自我は刺激に「従い」、自我はそれに「服従し」、そしてそれに向かい、次いで事物統一体に、解明的、概念把握的、理論的に判断的な、価値評価的、実践的な活動を遂行する。事物統一体は、その存在において、あるいは性状の様態(Wie-beschaffen-sein)、その美しさ、快適さ、有用性において、自我の関心を働かせ、それら事物統一体を享受し、それらと戯れ、それらを手段として利用し、それらを目的思想によって再形成する、等々という欲求を刺激する。次に事物統一体はますます新しい段階において自我の行為に対する刺激として機能する(IV, 189)。

以上のような人格と周囲世界との関係は「志向的關係」である。フッサールは人格を、周囲世界に対して志向的な関係にある自我として捉える。この志向的關係はフッサールによれば、「実在的な関係」ではなく、「実在的なものに対する志向的な関係」である。実在的な関係は、事物が存在しないとき脱落する。それに対して志向的關係はその場合も存続する。客観が現実存在するごとに、志向的關係には実在的關係が平行する(IV, 215)。ラングは人格と周囲世界との間の志向的關係を「志向性の拡大された概念」と見る。この概念は「動機づけの関係」とみなされる。すなわち、ラングによれば、フッサールはこの関係を「・・・に対する振る舞い」(Verhalten zu ...)と把握している。振る舞いとして定義された志向性は、「或るものについての意識」という契機を含むだけでなく、「或るものに対する反応」(Reagieren auf etwas)という関係を含む。この拡大された志向性をフッサールは「刺激と反応の動機づけ関係」(Motivationsverhältnis von Reiz und Reaktion)として考えているのである<sup>17)</sup>。したがって、ラングと共に、人格と周囲世界との関係は、拡大された志向性に基づく動機づけの関係であると言えよう。

人格と周囲世界との関係をフッサールは、しばしば主観と客観という術語を使っても表す。人格と周囲世界との関係は、志向的なく主観-客観関係>(IV, 189)であり、この関係においてわれわれは「自然の実在性としての事物と人間との間の因果関係」の代わりに、「人格と事物との間の動機づけ関係」(IV, 189)をもつ。その主観-客観関係は、「実在性として措定されたもの」と「措定する自我」との間の関係であるが、そこには「主観的-客観的な因果性との関係」、つまり「実在的な因果性」ではなく、

まったく独自の意味をもつ因果性のある。それが「動機づけの因果性」(Motivationskausalität)である。周囲世界の経験された客観は、あるときは注目され、またあるときは注目されず、より大きなあるいはより小さな「刺激」を行使し、或る「関心」を喚起し、そしてこの関心に従って「対向」(Zuwendung)への傾向を引き起こす、等々。客観は刺激を行使し、場合によっては意にかなう現出の仕方に従って行使する。客観は私に気に入らない現出の仕方において与えられていることがあるから、私は私の位置を適度に変えたり、私の視線を動かすなどして、刺激を経験する。ここで生じる身体の運動は自然の実在的な過程として考察されるのではなく、自由な運動可能性の領分が私に固有に現在している。「私はできる」(ich kann)には刺激と傾向の支配に従って、「私はなす」(ich tue)が続く(IV, 216)。結局、「主観は客観に対して振る舞い、そして客観は主観を刺激し、動機づける」(IV, 219)。

動機づけられた振る舞いの志向性に関して、ラングによれば、「何が客観をして動機づける客観にさせるのか」という問いが立てられる。この問いは動機づけられた人格的振る舞いの動機づけの基礎に関わる。ラングは、人格的振る舞いの動機づけの基礎はノエマの意味であると、と主張する。刺激と反応という自然主義的図式は、意味と意味に関わる関係づけられた振る舞いの関係に解釈し直されるのである<sup>18)</sup>。

#### 1.4 人格の社会性

人格にとって重要なことは、他者、つまり他の人格との関係、人格相互の関係である。主観はその周囲世界において単に諸事物を眼前に見出すばかりでなく、他の諸主観も見出す。主観は他の諸主観を人格として、つまりその周囲世界の中で活動し、その諸対象を通じて規定され、かついつでも新たに規定可能なものとして見る(IV, 190)。人格にとって他者との関係が不可欠であるということは、人格が単に何らかの共同体の一員であるということにとどまらず、他者関係なしには人格が人格として存在できないということである。人格は自分が他者たちと同じ人間であることを自覚している人間である。人格の中にはあらかじめ他者性が組み込まれている。

##### (1) 他の人格の理解としての感情移入

われわれは他者を感情移入(Einfühlung)<sup>19)</sup>によって把握する。フッサールは『イデー II』で感情移入を特に「共握」(Komprehension)という語でも表している。われわれは同じ事物や過程を経験するとはいえ、各人は彼にもつばら固有の諸現出や諸体験をもつ。私は、身体の原本的な経験と一体的に遂行された感情移入によって他者の諸体験を経験する。感情移入は一種の準現在化(Vergegenwärtigung)であるが、有り有りとした共同現存(Mitdasein)の性格を根拠づける(IV, 198)。

フッサールによれば、他者である人格を、われわれは「共握的経験」(komprehensive Erfahrung)あるいは「共握」によって理解する。その際、われわれは自分たちが共通のものに関係づけられていることを理解する。つまり、われわれが共通にその中に滞在する、大地と空へ、野と森へ、部屋へ、われわれが見る像、等々へ関係づけられたものとして理解する。こうして、われわれが「共通の周囲世界」(gemeinsame Umwelt)に対する関係の中にあることとわれわれが「人格結合体」(personaler Verband)



の中にあることは共属する(IV, 191)。フッサールはここで、われわれの「生(生活)の共通性」と「生が志向的に結合されていること」を見て取る。われわれは人格結合体の中であって、共通の周囲世界に相対している(IV, 191)。

私は人格や人間が何であるかを一般的に知っており、この人格や人間の性格、知、能力等について教示するのが感情移入の経験である(IV, 228)。人格への感情移入は「意味を理解する統握」である。すなわち他者の身体をその意味において把握し、そして他者の身体が担う意味の統一においてそれを把握するという統握である。感情移入を遂行することは、或る客観的精神を把握すること、或る人間を見ること、或る人間の集まりなどを見ることである。われわれは身体において表現される、人格と人格の諸状態を共握の作用によって把握する(IV, 244)。

まさに他者の共握を通じて、私は他者を、私が他者を統握するのと類似に私自身を統握するものとして、それ故、私を社会的人間として、身体と精神の共握的統一体として共握する。その中には、私が自分についての直接的精査(Inspektion)において見出す自我と、他者が私について表象する自我、つまり他者が他者にとって外的なものとしての私の身体と一体であると表象し理解する自我との同一化がある。このような統握によって私は私を人間結合体(Menschenverband)の中に編入することになる。こうして私は他者に対して本来自我であり、「われわれ」(wir)と語ることができる。われわれはすべて人間であり、互いに同種的であり、人間として互いに交流することができ、人間的なつながりの中に入ることができる(IV, 242)。私が自己を客観視して、他者から見た一人の人間として考えることができるとき、私は人格なのである。

さらに他の人格への感情移入には、他の人格の内面で経過する動機づけを理解するということも含まれる。フッサールによれば、私は私を他の主観の中に置き移す(versetzen)。感情移入を通じて私は、何が彼を、またどのくらい強く、どのような力でもって動機づけているのかを把握する。私は、彼がどのように振る舞い、また振る舞うであろうかを理解することを内的に学ぶ。多くの内的な相関を私は、私がそのように彼の中に沈潜する(vertiefen)ということを通じて理解することができる。彼の自我はそのことを通じて把握される。こうして彼の自我は、そのように向けられ、そのように力強い動機づけの同一的自我であることが把握される(IV, 274)。

## (2) 人格結合体とコミュニケーション的周囲世界

人格は個々ばらばらに周囲世界に属しているのではなく、いつでも何らかの共同体の成員として周囲世界に属している。周囲世界の人格は共同体(Gemeinschaft)ないし高次の人格的統一体の成員である。つまり夫婦と家族、階級、団体、公共団体、国家、教会などの成員は、自らをそれらの成員として知り、自らがそれに意識的に依存ないし反応するのを見出す。この場合の共同体ないし高次の人格的統一体は、個々の人格の参加や退去において時間の中に永続しつつ自らを保持し、その共同体の性質をもち、その人倫的および法的秩序を、他の共同体および個々の人格との協働におけるその機能の仕方、変化や発展の仕方をもつ(IV, 182)。

周囲世界は、他者についての経験の中で、相互理解(Wechselverständnis)の中で、および同意の中で構成されるが、これをフッサールは「コミュニケーション的な周囲世界」(kommunikative Umwelt)と

呼ぶ。コミュニケーション的な周囲世界はその本質によって、自分自身をその周囲世界の中に見出し、そしてその周囲世界を自分に相対するもの(Gegenüber)として見出す人格に対して相関的である。各人格は、それがすべての同意関係とそれに根ざす統覚を「捨象し」、あるいはむしろこの統覚を分離して考えることができる限り、そのコミュニケーション的な周囲世界の内部にその自我的な周囲世界をもつ。それ故、自我的な周囲世界がコミュニケーション的な周囲世界の本質的な核を形成している(IV, 193)。

同意のこの関係において諸人格の意識的な相互関係(Wechselbeziehung)そして同時に諸人格と共通の周囲世界との統一的な関係が作り出されている。さらに、この周囲世界は単に物理的なおよび有心的な(ないし人格的な)周囲世界にすぎないのではなく、理念的な周囲世界でもありうる。例えば、数学的な「世界」でもありうる。そのつどの周囲世界はたしかに、意識をもつ同じものとしての人格(互いにコミュニケーションし合う諸人格)に対面し、そして人格がその志向的な振る舞いの様式において反応する、「客観性」の一また理念的な客観性の一総体を包括する(IV, 193)。

社会性は、特別に社会的な、コミュニケーション的な作用を通じて構成される<sup>20)</sup>。その諸作用において自我は他者に向けられ、そして自我に対してこれらの他者も意識されているが、それは、それへと自我が向かい、そしてさらにこの向かうということを他者が理解し、場合によってはその振る舞いにおいて、一致のあるいは一致しない作用などにおいて自分へと立ち帰る、というものとしてである。これらの作用は、すでに互いについて知り、高次の意識統一を作り出し、態度を取る諸人格の共通の周囲世界としての取り巻く事物世界をこの意識統一へ編入する、諸人格の間の作用である。そして、この統覚的に編入されていることにおいて物理的世界も社会的性格をもち、それは精神的意味をもつ世界である(IV, S.194)。

### (3) 人格相互の影響

人格どうしは互いに影響を与え合う。物理的な事物が動機づける、すなわち物理的な事物が現出する現実として、経験された現実として、経験の主観を刺激し、主観を或る振る舞いへと誘発するように、人間は互いに直接的な人格的影響(personale Wirkung)、直観的な影響を行使する(IV, 192)。ここに人格相互の本来の関係があるであろう。フッサールによれば、人間は互いに対して「動機づける力」をもっている。人格はその精神的な行い(geistiges Tun)において互いに差し向けられており、人格はその相対する者(das Gegenüber)から理解され、そしてその相対する者を或る人格的な振る舞いの様式を取るようにさせ、これらの作用を相対する者が理解して把握するという意図で作用を遂行する。逆に、そのように決定された人はこの影響の中に喜んで入ったり、あるいはその影響を不機嫌に拒絶したりする。その場合、そのように決定された人は、乗り気であったり乗り気でないことを伝え、理解させることによって、自分にそのように決定させる人をして再び或る反応をするよう決定させる。こうして同意(Einverständnis)が形成される。語りかけには返答が続き、一方が他方になす理論的、価値評価的、実践的要求には、いわば振り向いて応答すること(antwortende Rückwendung)が続き、一致(同意)あるいは拒絶(不同意)、場合によっては反対提案などが続く(IV, 192-193)。

人格の発達他者の影響を通じて、つまり他者の思想、他者の暗示された感情、他者の命令を通じて

て規定される。たとえ人格自身は後になってそれを知ったり、思い起こすとしても。他者の思想は私の心の中に侵入してくるのであり、私の心的な状況に応じて、私の発達の状態に応じて、私の性向の形成、等々に応じて、種々の影響を及ぼす(IV, 268)。他者の影響には思想や感情といったものの他に、もっと漠然とした傾向や要求といったものがある。異他的なもの(das Fremde)、私によって受け入れられたもの、多かれ少なかれ外的なものは、他者の主観から発し、私に向けられる傾向(Tendenz)や要求(Zumutung)として特徴づけられる。私はこういった傾向や要求に受動的に従ったり、いやいやながら、あるいは強いられて従う。しかし場合によっては私はそれを自発的に我がものにし、そのときにはそれは私の所有物となる。そういう場合、それは私が従い、私を外から規定する要求という性格はもはやもたない。それは私の自我から発する態度決定となったのである。それは他の自我に由来するものを引き受けるという性格をもつことになる。このような要求には、他の人格から発する傾向と並んで、未規定的な一般性の志向的形態の中に登場する、習俗(Sitte)、風習(Brauch)、伝統、精神的環境(geistige Milieu)がある。このようなものは、例えば「ひとはそのように判断し、ひとはそのようにフォークを用いる」などといったことである。また社会的なグループや地位(Stand)などの要求もある。それらにわれわれは受動的に従うか、能動的に態度をとってそれに対して自由に決定することができる(IV, 269)。

われわれはこのように、或る特定の習俗や伝統を備えた周囲世界(社会)の中で生まれ、生長していく。その際、われわれは一定の判断の仕方、振る舞い方を身につける。これは「ひとは一般に～する」という意味での人格である。しかし、人格には自律的・能動的な側面があり、これが倫理的な人格を可能にする「理性の自律」(Autonomie der Vernunft)である。フッサールによれば、理性の自律、人格の主観の自由は、私が受動的に他者の影響に従うのではなく、私自身から決定するという点にある。そしてその中には、私が他の傾向、衝動に引きずられるのではなく、自由に活動するということがある。これは理性の様式の中にあることである(IV, 269)。

人格は或る行為を実際に行うこともできるし、行わないこともできる。われわれは行為をさまざまな可能性の中で選択し、実行したり、実行を差し控えたりする。そのことが可能であるのは、人格が能力の主観であるからである。そこで、次に人格が能力の主観であることを考えてみよう。

## 2. 人格の能力

人格的自我は体験の流れを一貫して支配する発生(Genesis)の中で根源的に構成される(IV, 251; 255)。(人格的)自我は統覚的統一体以上のものであることができ、またそれとは別のものであることができる。(人格的)自我は、まだ登場しておらず、まだ統覚的に客観化されていない隠された能力(Fähigkeit)(素因 Disposition)をもつことができる(IV, 252)。

フッサールは人格を、「私はできる」(ich kann)に基づく能力の主観と考える。人格は自分の能力を展開させることができる。人格は展開(発達)の中で自分が何者であるかを知る。フッサールによれば、人は自分が何であるかを知らない。彼はそれを知ることになる。それは自己経験、自己統覚が拡大することによってである。「知ること」(Sichkennenlernen)は自己統覚や自己の構成の展開と一体であり、

自己統覚や自己の構成は主観自身の展開と一体となって遂行される(IV, 252)。

## 2.1 能力の主観としての人格

自我は「私はできる」の体系である。その際、物理的な「私はできる」と身体的および身体に媒介された「私はできる」ならびに精神的な「私はできる」が区別される(IV, 253)。ここで重要なことは身体的な能力としての「私はできる」と精神的な能力としての「私はできる」との関係である。私は私の身体に対して「力」(Macht)をもち、この手を動かし、また動かすことができる。この身体的な能力にはピアノを弾いたりするだけでなく、歩行を行ったりすることも含まれる。身体的な能力は病気でそれを失うとき、気づかれる(IV, 254)。私が私の器官を知覚器官として、しかも感覚生活(Sinnesleben)の実践的器官として「自然に自由に」動かすことができるとき、私は「身体的・実践的に正常」(leiblich-praktisch normal)である。しかし、この「身体的に正常」ということは、私のさまざまの精神的な作用にも関わる。私が私の空間的な経験、空想形成を自由に遂行したり、私の記憶を自由に歩み抜くことができるとき、私は表象のはたらきの中で精神的に正常である。このとき私は正常な空想をもち、正常な記憶をもつ。同様に、私は正常な思惟活動をもつ。すなわち、私は推理したり、比較したり、区別したり、結合したり、計算したりすることができる(IV, 254)。

こうして精神的自我は能力(Vermögen)の有機体として統握され、子供、青年、壮年、老年の段階を備えた、或る正常な典型的様式における能力の有機体として把握される。主観はいろいろのことが「できる」のであり、そしてその<できる>(Können)に従って刺激を通じて、顕在的な動機を通じて行いへと決定されている。主観はいつでもその能力に従って再び活動し、そしてその行いを通じて再び変化し、豊かになり、強くなったり弱くなったりする。このような能力は空虚なくできる>ではなく、そのつど顕在化され、いつでも活動へ移る用意ができていて、つまり帰属する主観的なくできる>という能力を遡って示す活動へ移る用意ができていて、積極的な潜在性である。主観にはこのような根源的な能力(Urvermögen)があるのであり、その上で生の顕在性から発現した、獲得された能力がある(IV, 254-255)。

フッサールは人格的自我に、「衝動的に規定された人格」(triebhaft bestimmte Persönlichkeit)という側面、つまり根源的な本能によって突き動かされ、本能に受動的に従う低次の側面と自由に活動する理性的な高次の側面を認める(IV, 255)。人格的自我の低次の受動的側面には連合(Assoziation)の動機づけが働いている。この動機づけは、今の意識の中を、すなわち顕在的な時間意識(原本的な意識)として特徴づけられている意識経過の統一の中を経過する。それは、以前の理性作用、理性の能作からの沈殿である体験であったり、それともまったく非理性的である体験、つまり感性、押し迫ってくるもの、前もって与えられたもの、受動性の圏域において営まれたもの、といった体験の動機づけである。その中で、個々のものは暗い基盤の中で動機づけられており、その心的な諸根拠をもっている。この諸根拠に対しては、どのようにして私はそこへ至るのか、何が私をそこへもたらしたのか、と問うことができる。動機はしばしば深く隠されているが、精神分析を通じて明るみに出すことができる(IV, 222)。

高次の側面では人格的自我は、自律的な (autonom)、自由に活動する、特に理性動機 (Vernunftmotiven) によって導かれた自我として構成される。さらに人格的自我は習慣に従う自我でもある。習慣は根源的に本能的な振る舞いに対すると同様に、自由な振る舞いに対しても形成される。習慣と自由な動機づけは編み合わされる。私が再び自由に活動するならば、私はなるほど習慣にも従うが、私が動機に従い、自由な決定において理性に従う限り、私は自由である (IV, 255)。

## 2. 理性作用の主観、自由な自我としての人格

理性作用の主観としての人格は、高次の人格と見なされ、これが道徳的な人格ということになるであろう。フッサールは、自己知覚や他者の知覚においてわれわれが把握する統覚的な統一体である「人間の人格」(menschliche Person) から、「理性作用の主観としての人格」(Person als das Subjekt der Vernunft) を区別している。この理性作用の主観としての人格は、その動機づけと動機づけの力が根源的な固有の体験のはたらき、ならびに他者を追理解する体験のはたらきの中でわれわれに与えられている人格である (IV, 269)。動機づけという観点からは、理性作用の主観は「理性の動機づけ」(Vernunftmotivation) に基づく主観である。理性の動機づけは、理性の規範に従う圏域における、活動的な作用による活動的な作用の動機づけである。この動機づけには、知覚による判断の動機づけ、経験によって判断を正当化したりその誤りを正すこと、推論の中での判断作用による判断作用の動機づけ、情動 (Affekte) による判断の動機づけ、逆に判断による情動の動機づけ、憶測 (Vermutung) や疑問の動機づけ、感情・欲求・意欲の動機づけが含まれる。要するに、これらは「態度決定 (Stellungnahmen) による態度決定の動機づけ」である。理性の動機づけは、最も広い意味での真なる存在という領域の相関者を伴った、高次の構成的な意識の統一体を樹立する (IV, 220-221)。

フッサールは、理性作用の主観を「自己責任的」(selbstverantwortlich) 主観とも呼ぶ (IV, 257)。この主観は、自由であったり、服従し、不自由であったりする主観である。自由や服従をフッサールは自我の「私はできる」に基づく能力に関係づける。私の求心的な (zentripetal) 自我作用への関係において私は <私はできる> の意識をもつ。自我の諸活動の経過全体の中には、単に過ぎ去る経過があるのではなく、いつでも自我中心からの経過が生じている。そしてその限りで「私はなす」(Ich tue)、「私は行為する」(Ich handle) という意識が生じている。私が何らかの情動によって心を奪われたり、魅せられるならば、本来的な「私はなす」は打ち破られ、活動的なものとしての自我は妨げられ、不自由であることになる (IV, 257)。

フッサールは、「私はできる」をさらに、論理的な可能性、実践的な可能性と不可能性、実践的作用の中和性変様および根源的な能力意識 (主観的力、能力、抵抗) に分ける (IV, 257-258)。このような「私はできる」に基づいて、理性作用の主観としての人格の能力に独自の側面を見て取ることができる。人格はたしかに現実世界の中に生きる人間であるが、人間は想像や空想の世界にも生きる。想像されたもの、想像された行為もわれわれが生きる現実に含まれるであろう。

## (1) 実践的可能性

「私はできる」は「実践的な可能性」(praktische Möglichkeit)を表す。フッサールは、実践的可能性をまず意志(Wille)と定立(Thesis)に結びつけたものとする。諸々の実践的な可能性の間でのみ私は決定でき、実践的可能性のみが私の意志の主題でありうる。私は、私の力(Macht)、私の能力(Fähigkeit)の中にはないものは意欲できない。意志が私の力の中にある限り、定立の遂行は私にとって或る実践的に可能なものである(IV, 258)。経験の中で「私はできる」と「私はできない」が区別される。この場合の「できる」と「できない」は抵抗(Widerstand)の克服という観点から考えることができる。「私はできる」というのは、抵抗なしに行うということ、ないしく抵抗を欠いたことができる>の意識、および抵抗を克服した行いがある、ということである。抵抗と克服の力には段階が存在する。抵抗が克服できる時、抵抗の不活発な力に対して能動的な力がある。抵抗が克服されえないとき、「うまくいかない」「私はできない」ということになる。抵抗ということで、私の意志の圏域に属するものが問題になっている(IV, 258-259)。

「私はできる」に定立が伴っているということは、次のように考えることによって明らかとなる。いま静止している私の手を私が動かす、と私は表象する(思い浮かべる)ことができる。私が私の手の運動を、「私は私の手を動かす」という形式で表象するならば、私は「私はなす」を表象する。しかし、そのような表象はまだ「私はできる」ではない。フッサールによれば、「私はできる」の中には、単に表象が存しているのではなく、さらに定立が存している。この定立は単に私自身に関わるだけでなく、「行い」(Tun)に関わるのであり、しかも現実の行いではなく、まさに「なす」(Tun können)に関わる(IV, 261)。したがって、フッサールによれば、直観的な表象(単に思い浮かべること)に基づく単なる可能性である論理的な可能性から、そこに行為に関わる定立が含まれる実践的可能性が区別される(vgl. IV, 261)。

## (2) 実践的な中和性変様と可能な行為

人間の行為には、単に想像の上でのみ考えられる行為も含まれる。私はもしかしたら或る行為をしたかもしれない。しかし、実際にはそのようなことはしない。そうしないことには動機づけがあるのではないか。このような可能な行為をフッサールは、実践的な作用に対する中和性変様(実践的な中和性変様)から導き出す。ここで意志と定立に基づいた「私はできる」(ich kann)という実践的可能性に対して、行為の中和性変様から取り出される「私はできるであろう」(ich könnte)という新たな実践的可能性が提出される(Vgl. IV, 265)。

さてフッサールによれば、中和性変様(Neutralitätsmodifikation)にはさまざまな種類のものがある。臆見的意識(対象的存在の意識)の中和性変様は、「単なる表象」(bloße Vorstellung)である。臆見的意識が知覚や記憶ならば、中和化(Neutralisierung)は中和的に変様された直観を生じさせる。そして、この中和化された直観から、確実であることや存在そのものの変様として与えられる、理論的(臆見的)可能性、可能存在が取り出される(IV, 262)。『イデーン I』でフッサールはこの中和性変様を、「臆見的様相をまったく停止させ(aufheben)、その力をまったく殺ぐ(entkrafte)作用」、働き(Leisten)を「括弧にいれること」(einklammern)、「未決定のまま宙づりにしておくこと」(dahingestellt-sein-lassen)、「働きの中に身を『置き入れて』考えること」(sich-das-Leisten-„hineindenken“)」、働きによって作り出され

たものを、それに関与することなく「単に考えること」(bloß denken)等々、と表している。そして、このような変様においては、措定性格は力を欠如したものとなる。このような変様においては、存在的であること、可能存在的であること、蓋然的であること等々は意識されてそこにあるが、しかし「現実に」(wirklich)という仕方ですここにあるのではなく、「単に考えられたもの」(bloß Gedachtes)としてそこにあるのである。すべては変様な括弧をもつようになるのである(III/1, 247-248)。

このような臆見的意識の中和性変様に対して、行為の場合に問題になるのが実践的な中和性変様である。フッサールによれば、実践的な中和性変様から実践的可能性が取り出される(IV, 263)。このような実践的可能性を考えるために、フッサールが挙げている例を検討してみよう。フッサールは次の例を挙げる。2.2=5 ということを私は直観的に表象することができない。すなわち 2.2=5 であることを私が明証のうちで判断し、本来的に直観的に判断する、ということを私は直観的に表象することはできない。しかし、2.2=5 であると私が判断することを、私は表象することはできる。すなわち、非本来的に、不明瞭に、混乱してそのテーマを遂行しつつ(IV, 264)。三角形の内角の和は三直角である、と私が判断することを私は表象することができるであろう。けれども私はそのように判断することはできないであろう(IV, 265)。

これらの例で、「 $< 2.2=5$  であると私が判断すること $>$ を私は表象することができる」と「 $<$ 三角形の内角の和は三直角であると私が判断すること $>$ を私は表象することができる」が、実践的可能性を表しているであろう。これらの場合、いずれも「不合理な事態を私が判断する」ということを私が表象することが語られている。この表象が可能であることが実践的可能性なのである。実践的可能性はメタレベルの行為を表していることがわかる。

これらの例は、理性作用の圏域全体に対して妥当するが、さらに同じようなことは心情や意志の圏域全体に対しても妥当する。これに関してフッサールは次のように述べる。私は次のように考えることができる。私が厳密な考量の中では価値評価しえないであろう或るものを私は価値評価したり、欲求したり、それを目的や手段として意志するであろう、と。また私が考量の際にやはり得ようと努力しないであろうし、そうできないであろう或るものを私は我がものとされた手段として努力して得ることができるであろうし、そうするであろう、と。ここには「私はできる」(ich kann)に対して、「私はできるであろう」(ich könnte)がある。「私はできるであろう」は $<$ 私は～の中へと私を空想する $>$ (ich phantasie mich hinein)ということであり、それは臆見的作用、価値評価作用の中和性変様を遂行するということである(IV, 264)。

次に人間の倫理的行為に深刻な問題となる殺人や盗みという反道徳的・反社会的な例を考えてみよう。フッサールは次のように述べる。「私は殺人、盗みなどを遂行するであろう、と表象する(思い浮かべる)ことができるが、私がそれをするであろう、と表象することはできない」(IV, 265)。上述の算術や幾何学の例と同じように、この場合の実践的可能性もメタレベルの行為であることがわかる。「 $<$ 私は殺人、盗みなどを遂行するであろう $>$ と私が表象することができる」が実践的可能性を表すであろう。しかし、「私がそれを行うであろうとは、私は表象できない」とフッサールは語る。これをフッサールは次のように説明する。

この例の前半部分は、一般化すると「私はそれをなしうるであろう」を表し、それは行為の中和性

変様とそこから取り出される実践的な可能性である。後半部分は、同様に一般化して「にもかかわらず私はそれをなしえないであろう」を表す。ここにはこの行為に対する根源的なくできる>の意識あるいは力の意識が欠けている。この行為は私の人格の本性(Art meiner Person)、つまり私を動機づけさせる本性に反する<sup>21)</sup>(IV, 365)。

私が私の顕在的な生(生活)から空想の生(生活)へ移っても、空想の生はやはり生の統一であり、そこには動機づけを通じた統一がある(IV, 264-265)。私が空想し、空想の現実あるいは中和化されて与えられた世界の中に、また何らかの仕方ですべてに空想されて知られた世界の中に生きるとするならば、私はいま次のことを判断する。すなわち、いかにしてしかじかの動機が私に作用するであろうか(詳しくは、この空想の周囲環境の疑似動機が)、またいかにしてあるがままの私が行為するであろうか、行為しうであろうか、判断し、価値評価し、意志しうであろうか、およびそうできないであろうか、ということ(IV, 265-266)。

こうして人格は「私はできる」の主観であるが、「私はできるであろう」の主観でもあり、人格の行為は想像の行為、メタレベルでの行為でもある。しかし、その場合でも人格の行為は動機づけをもつ。現実の世界の豊かさは人間の想像を許し、想像の行為も動機づけに関わることがあると言えるであろう。

## 2.3 人格の類型

人格は最も広い意味で考えるならば、類型的な性格、性格の特性(Charaktereigenschaft)をもつ(IV, 271)。人間を特有の生の様式をもったものとして捉えるとき、それが人格だと言えるであろう。

フッサールは人格の類型を、一般類型的なもの(Allgemeintypisches)、特殊類型的なもの(Sondertypisches)および個別類型的なもの(Individualtypisches)というように分類して論じている。それは人間-自我の類型であり、その追理解されるべき生の活動と触発における自我の振る舞いにおける類型である(IV, 270)。人格の類型は、自我がどのように動機づけられているかということによって取り出される。フッサールによれば、人格(Persönlichkeit)は、その本質に従って、「人間-主観」(Mensch-Subjekt)という一般類型ないし性格の内部での特殊性格から構築される。この特殊性格は、最下の特殊性としては、この人間主観の個別(個人)類型を形成する。それぞれの人間はその性格をもっており、しかじかの事情によって動機づけられているという仕方に関して、触発と活動における生の様式(Lebensstil)をもっている。人間はその様式を単に今までもっていたのではなく、その様式は少なくとも相対的に生涯において持続するものであり、さらに一般的に特徴的に変化するものでもあるが、変化によって再び統一的様式が示される、といったものである(IV, 270)。

人格が類型的な生の様式をもつということは、その生の様式を知ることによって、人格の振る舞いが予想されるということである。われわれが人をその人格において、その様式において正しく統覚するならば、人がどのように振る舞うかは或る程度予期できる。この予期は、限界づける志向的な枠組みの内部での未規定的な規定可能性の地平をもつ。予期は様式に対応する、もろもろの振る舞いの仕方の一つに関わる。例えば、「愛想のよい」人間はしかじかの場合に、空虚な愛想のよいことをぺら



べらとしゃべるであろう。その際、彼の語り方は様式的な刻印をもつ(IV, 270)。人格的生には、各人にとってそれぞれ別のものである一つの類型が属する。この類型は人格に諸々の経験が生じて、或る範囲内では同じままであり続ける(IV, 271)。

### 3. 自然と精神

われわれはこれまで人格をその周囲世界に対する志向性の主観として、周囲世界における事物や他の人格に対していかに振る舞っているか、またその場合の動機づけはいかなるものであるかを論じてきた。その過程で、人格はさまざまな刺激を受けながらも自由に運動し、行為する能力をもった主観、理性作用を行う主観であることが明らかになった。このような人格は、さらに精神と自然という大きな枠組みの中で論じることができる。このとき人格が重層構造をもつものであることが明らかになる。ただし、この重層構造は静態的に考えられてはならない。人格のそれぞれの層は自体的に存立するものではなく、それぞれのアスペクトで見られた人格の相を示すのである。

フッサールは『イデーニ II』の 62 節で人格主義的態度と自然主義的態度の相互浸透を説き、自然と精神という二つの種類の実在性が互いに関係し合うことを述べている。つまり自然主義的態度と人格主義的態度、あるいは自然科学的態度と精神科学的態度、そして相関的に自然と精神という二種類の実在性は互いに関係し合うのである(IV, 281)。したがって自然と精神がどのように相互に関係し合うのかを解明することがここでの課題である。

フッサールはたしかに自然に対する精神の優位、それと相関して自然主義的態度に対する人格主義的態度の優位を説いているが、精神の「基盤」(Untergrund)としての自然に独自の意味を認め(自然側面 *Naturseite*)、これに関わる心と身体に重要な役割を認めている。ここに心身論、身体論に基づいたフッサール独自の人格論の特色を見ることができよう。

さて「精神」とは何を意味するであろうか。フッサールは精神ということで大きく三つのことを考えているように思われる。1.心と同じように、感性的諸現出や身体に心を吹き込む(*beseelen*)働きをする精神。2.人格(人格的自我)と同じ意味での精神。3.高次的人格である共同精神、および人格が作り出したり、人格から意味を受けとる文化客観から成る精神的世界。

精神の自然側面を示すのは、心と身体である。心と身体は精神の層として位置づけられる。それ故、精神の層として位置づけ直された心と身体を以下でそれぞれ考えてみよう。

#### 3.1 精神の基盤としての心

フッサールは心(*Seele*)と精神(*Geist*)を区別する。この区別には、自然と精神世界、自然科学と精神科学、一方での自然科学的な心理論と、他方での人格理論(自我論)ならびに社会理論(共同体論)が依存している(IV, 172)。このように「心と精神」の区別は大きくは「自然と精神」の区別に関わることがわかる。精神と区別された心は領域の上では自然に属する。心は二重の相貌をもつ実在性である。第一に、身体によって条件づけられたものとして心は物理的に条件づけられており、物理学的身

体に依存している。同一的実在性として、心はその実在的諸状況を自然(Physis)の中にもつ。第二に、精神によって条件づけられたものとして、心は精神との実在性の連結(Realitätskonnex)のうちにある(IV, 284)。しかし、心は自体的に存立するものではなく、身体と精神のはたらきに応じて、さまざまに機能するものと考えべきであろう。このことが心の重層構造を表す。そしてこれが人格の重層構造の基礎を成すとわれわれは考える。

心は『イデーニ II』でさまざまに語られている。有心的[動物的]な自然、心的なもの、心的実在性、有心的実在性、心的自我、実在的な心的主観などである。フッサールは『イデーニ II』の第二篇「有心的自然の構成」で、心をまず、物質的な身体と結合して自然科学的研究の対象になっているような、人間の心(Menschenseele)ないし動物の心(Tierseele)として考察する。心的な実在性としての心は自然主義的態度において研究されるときに見出される心である。そこで心が自然主義的態度においてどのように考えられるかを見てみよう。心は自然科学的にはそれ自体無であり、心は身体に起こる実在的な出来事の単なる層である。心は身体に心を吹き込み、そして心を吹き込まれた身体は空間・時間的な世界の統一の内部での自然客観である。心的なもの(das Seelische)は身体と経験的ないしは実際に一体となっている。心的特性は層として、物理的身体の実在的に分離不可能な付属物(Annex)として際立たされる。心的なものは身体に局在化(Lokalisation)されると考えられる。心は身体の中にあり、かつ身体がまさにあるところにある。局在化には時間化(Temporalisation)が対応しており、心的統握によって意識体験は心理物理的状态という意味を得て、それと共に客観的自然の形式である客観的時間へ編入される(IV, 175, 176, 177, 178)。心の自我的な状態は、心的なもの一般と同様に、自然主義的経験の中で、物理的に現出する身体に添えられ(beigelegt)、ないし挿入され(eingelegt)、身体と共に周知の仕方でも局在化され、時間化される。この点では「私は考える」ということも一つの自然事実(Naturfaktum)であり、これは身体と身体的出来事の中に基づけられていて、自然の実体的・因果的連関によって規定されている(IV, 181)。

精神と心と身体の関係は次のようにまとめられる。心という実在性は身体(身体物体 Leibkörper)という実在性に依存し、精神はその精神的な諸作用において心に依存している。このように精神的自我は心に依存しており、そして心は身体に依存している。それ故、精神は自然に条件づけられて(naturbedingt)いる。精神は条件的に(konditional)依存する基盤をもっており、精神は心という、そのものとしては物理的自然を通じて条件づけられており、そしてそれに依存している自然的素因の複合をもっている(IV, 281)。

以上のように(自然主義的態度で)把握される心は、人格主義的態度によって、人格的自我の基盤としての自然側面として把握し直される。精神(人格的自我)は二つの層から成る。それは、性格素質(Charakteranlage)、根源的で隠された素因(Disposition)の暗い基盤である下層と、特殊に精神的な層であり、「行為者である知性」(intellectus agens)、「自由な作用の自我」としての「自由な自我」の層である高次の層である(IV, 276)。フッサールは、性格素質や根源的で隠された素因の暗い基盤を広い意味で「感性」と呼ぶ。そうすると、人格的自我の二つの層は「感性と理性」ということになる。しかし、この感性は理性とまったく相容れないものではない。フッサールによれば、この感性もその規則をもち、一致と不一致の悟性規則をもち、「隠された理性の層」と呼ばれる(IV, 276)。

フッサールはこの精神(人格的自我)の二つの層を「感性的心」(sinnliche Seele)と「精神の心」(Geistesseele)とも呼んでいる。しかし、ここで二つの心があるのではなく、心は活動の仕方によって二つの相を示すと考えるべきであろう。下層の諸体験において感性的な心が告知される。この諸体験において、注意し、把握し、態度決定する自我自身に関わらない、表象素因、習性的特性が告知される。他方、感性的な低次の心は態度決定の自我と一体となって、経験統一を形成する。このとき、心は「精神の心」と呼ばれる。精神の心は客観的な(自然界に属する)実在性ではない。この心は私の心であり、私の自我主観に属し、それと不可分に一体となっている(IV, 279-280)。

精神の下層は主観性の基盤であり、感覚についてのその意識所有、感覚の再生についてのその所有、その連合、統覚についてのその形成、しかも経験統一を構成する最下の基盤である。この自然側面には直接に低次の感情生活(Gefühlsleben)、衝動生活(Triebleben)そして対向の一般的機能とまったく同様に、特殊な自我機能である注意の機能も属する。自然側面は特殊な自我存在と自我生活に対して橋渡しをする(IV, 279)。フッサールがここで感情生活や衝動生活を精神の自然側面に挙げていることは注目すべきであろう。われわれの心のうちには、絶えずさまざまな感情や衝動が渦巻いており、このような情動的基礎なしには人間の高次の精神活動も成り立たない。

精神(人格的自我)の自然側面は、精神の心という層であるだけでなく、精神を自然に結びつけるものである。感性的圏域において、つまり最も広範に捉えられる基盤の圏域において、われわれは連合(Assoziation)、固執(Perseveration)、決定する傾向(determinierende Tendenz)などをもつ。これらのことが自然の構成をなすが、この自然の構成は精神に対しても現存することによって、それらのことはそれ以上にも及ぶ。すなわち、精神の一切の生を、連合、衝動、衝動の刺激や規定根拠としての感情、暗闇の中に浮かび上がるもろもろの傾向などの盲目的活動が貫いており、これらは盲目的な規則に従って意識のそれ以上の経過を規定している。これらの法則性には主観の習慣的な振る舞いの様式が対応する(IV, 276-277)。

自然を構成する受動的な作用は精神を構成する作用でもある。精神は高次の理性的な作用を遂行するだけでなく、それ自身生でもあるのである。フッサールはこのような精神を、具体的な自我として「自我-人間」とも呼ぶ。フッサールによれば、精神は態度決定の諸作用の抽象的自我ではなく、「完全な人格」(volle Persönlichkeit)であり、私が態度をとり、私が思惟し、価値評価し、行為し、作品を完成させる等々という「自我-人間」(Ich-Mensch)である。その場合、私には諸体験の基盤が属し、そして諸体験の活動の中で告知される、自然(私の自然)の基盤が属する。この自然は低次の心的なものであるが、態度決定の圏域の中にも及んでいく(IV, 280)。

### 3.2 精神と自然の媒介者として身体

これまで論じてきたことからわかるように、フッサールは、「身体と心」に「精神と自然」を媒介する役割を見ている。われわれは二つの極、つまり物理的自然と精神、そしてその間に身体と心をもつ。そして身体と心は、本来、物理的自然に向けられた側面に従ってのみ「第二の意味での自然」である。現出においては、それらは精神的な周囲世界に属する。しかし、現出はまさに物理学的自然

の現出を意味し、そしてそれはいま物理学的世界に対する関係を作り出す。他方で、現出する身体と心は、精神的な周囲世界に属し、そしてその中で精神的実在性の性格を受け取る (IV, 284-285)。

ここでは特に身体と精神の関係を考えてみよう。この問題に関しては、メルロー・ポンティがフッサールの『イデー II』の元になった草稿を研究し、身体の分析を独自に解釈して身体性の現象学を展開したことは周知のことである。自明なように、精神は身体を欠いては精神世界において活動できない。精神の活動はまず身体を自由に動かすことにある。フッサールはこう語る。精神はその自由において身体を動かし、そのことによって精神世界における活動(Wirken)を遂行する。身体は精神世界の客観であり、そしてさらに自然の中の事物である。身体は単に私にとって現出にすぎないのではなく、私にとって「心を吹き込まれた」ものであり、意識に関して「私の根源的に自由な運動の器官」であり、「精神の器官」である (IV, 96, 282)。

ところで、身体は「私の」身体としては私に最も親密なものであり、私が直接に内的に意識できるものである。しかし、私が直接に内的に意識しているものが、何故に「身体」と言われるのか。私は自分の身体を直接に内的に意識できるとはいえ、私は自分の身体の全体を見ることはできない。例えば、私の背中や顔の前面は私には見えない。たしかにそれらは鏡に映して見るができるが、それはあくまで間接的な像にすぎない。そうすると、私は私の「身体」についての知をどこから手に入れたのか。それは他者からである。私は他者の身体を見て、それを自分が内的に意識する物体に当てはめているのである。けれども、私が他者の身体として見るものは、あくまで或る物体である。何故それが他者の「身体」なのか。身体は単なる物体ではなく、精神を蔵するものである。私は或る物体を見て、それを他者の身体と見なす<sup>22)</sup>。それを可能にしているのが、「表現」(Ausdruck)である。表現は物的なものに心的なもの(精神的なもの、意味)が宿ったものである。身体は精神世界において表現として存在している。身体は「精神の表現」(IV, 96)である。

フッサールによれば、われわれは身体のみを見やったり、理解の中で人格のみを見やるということはしない。そうではなく、われわれは表現(身体)と表現されるもの(人格)の間に作り出された結合を一つの全体的なものとして考え、この全体的なものが一致的な経験の中でいかに振る舞っているかを見る。経験する把握に先立って、この表現と表現されたものの統一は知覚的統握の経過の中で一つの実在性として意識されている。こうして表現を通じて経験する主観に対して他者の人格がそもそもはじめて現存しているのである (IV, 245)。したがって、ゾンマーが言うように、精神的世界において表現する身体はまず他者の身体である。他の自我が最初の人格である。まだ人格でない私が、他者の身体を二重の層をもったものとして統握する。すなわち、物理的実在性を共に構成する部分として、および精神の表現として。しかし、この私の統握には、他者が私と私の身体を同様に統握する、ということについての知が属する。精神の統握は自分の自我に移される<sup>23)</sup>。

身体は精神的なものにおいて現象学的に或る包括的な役割を果たしている。純粹に精神的なものは、一部は、能動(Aktion)であり、一部は受動である、一切の活動的な作用の中にある。自我的なもの、主観的に精神的なものは、自分の身体との特別な結合をもつ。むしろ第一義的には、この結合は、身体的に統覚されてすべての身体的なものの中に共に入り込む、特別な与件(運動感覚、身体感覚から放射する、運動感覚の経過への傾向)に関して存立する。その場合また、他者の身体を広い範囲での

精神生活に対する身体として解釈することを許す、表現がそれに連関する。身体は、それが私の知覚の、事物世界から外に出る私の活動の媒介者 (Vermittler) である限り、単に私に対して私の身体として特別に主観的なものにすぎないのではない。すなわち、身体は、それが精神的なものを表現する限り、他者によって統握されて或る意義を、或る精神的意義を獲得する (IV, 282-283)。

身体は直観の内部で二重の相貌をもつ。身体は直観的な事象世界としての自然に関して実在性であると同時に、精神に関して実在性である。それ故、身体は、それに実在的な状況の二つの方向が属する二重の実在性である。フッサールは身体に、「感覚論的身体」(aesthesiologischer Leib) と「意志身体」(Willensleib) という二つの側面を区別する。身体は二面的な実在性である。感覚論的身体は、感覚する身体として物質的身体に依存している。感覚論的層は「自由に動くもの」という層に対して基盤である。意志身体は自由に動く身体である。しかし感覚論的身体と意志身体は一体となっている。感覚論的な意味での身体は、それぞれの人格的主観の前提された周囲世界に属し、そしてその自由裁量 [恣意] (Willkür) の野である。それは精神的かつ因果的な関係である。私は私の「承知した」(fiat) を遂行し、そして私が意志するが「ゆえに」、手が動く。身体は、私から自由に動く身体として或る精神的な実在性であり、その実在性の理念に自由な運動の主観としての自我への関係が属する (IV, 283-284)。

われわれが精神的生 (geistiges Leben) の表現として統握する身体は、同時に普遍的な因果連関に編入される、自然の一部である。そしてわれわれが身体的表現を通じて把握し、そして動機づけ連関の中で理解する精神的生は、身体そのものへのその結びつきによって自然過程を通じて条件づけられ、自然に属するものとして統覚される (IV, 247)。周囲世界における物件としての身体は、経験された直観的な身体物体であり、そして物理学的身体の現出である。物件としての身体は感覚論的な身体に対する基盤であり、それによってわれわれは意志身体、つまり自由に動く身体に対する基盤をもつ。そして、そのようにして身体は精神との因果性のうちにある (IV, 285)。したがって身体は、精神的因果性 (geistige Kausalität) から自然因果性への転換の場所である (IV, 286)。

### 3.3 自然と精神の相関

われわれは最後に、ラントグレーベに従って、『イデーニ II』の中で十分に分析されなかったこと、あるいは新たに展開される可能性のあることを指摘して、本稿を締めくくりたい。

フッサールは『イデーニ II』の第三篇「精神的世界の構成」の最後で、可能な「自然化」(Naturalisierung) の限界を指摘し、「自然の相対性」と「精神の絶対性」を主張する。フッサールによれば、精神は自然に依存するものとして捉えられ、それ自身自然化されるが、それは或る程度までであるにすぎない。単なる自然への依存性とか、物理的自然のようなものへの還元、自然科学的な一義的規定の目標を伴った規定の仕方全体における何か類比的なものへの還元を通じて一義的に精神を規定することは考えられえない。諸主観は、自然であることの中に消え去ることはできない。というのも、その場合、自然に意味を与えるものが欠けるであろうからである。自然は一貫した相対性の野であり、そしてそれでありうる。何故なら、相対性とは、一切の相対性を担う絶対的なもの、つまり精神に対していつでも相対的であるからである (IV, 297)。

フッサールはこのように自然を「一貫した相対性の野」と位置づけ、これに対して自然に意味を与える精神を絶対的なものと捉える。すると、ここに「自然の相対性」と「精神の絶対性」という硬直した二元論、あるいは自然を、精神の形成体として精神の中に吸収しようとする絶対的観念論があることになるのであろうか。しかし、フッサールが述べている「自然に意味を与える」と「一切の相対性を担う絶対的なもの」という言い方を、われわれは現象学の研究の特色である「相関性」の表現と解釈する。自然は精神に相関的に開示されるのであり、精神の態度に応じて自然は単なる事物の世界、あるいは人間が自分のために利用すべき対象の世界、あるいは人間を含めた生命を育む世界等々として現れるのである。

ラントグレーベは『イデー II』の考察過程に現れた自然の二つの局面の緊張に注目する。それは、一方での実在性の総体としての、また高次の領域のすべての存在者、つまり有心的存在者と精神的存在者がその上に構成されている、「基づける領域としての自然」と、他方での「精神の形成体としての自然」との間の緊張である。ラントグレーベによれば、この緊張は後者に有利なように止揚されて、その結果、他のもろもろの存在領域を基づける最下層の存在領域としての自然について語ることはもはやできなくなる。以上の帰結は、因果的に規定されうる空間時間的な実在性としての自然の事物に基づける役割を認めることになった最初の諸考察とは整合しない。自然の事物に基づける役割を認める論拠は、自然の事物が「原対象」(Urgegenstände)の領分、すなわち能動的な意識の能作によるいかなる形成もまだそのうちにもたない、最終的には「原感性」(Ursinnlichkeit)を通じて与えられる、単純に受容する受動的な意識における所与の領分である、ということである。しかるに、すべての能動的な意識の能作が、結局は、素材としての、すなわち意識の能作によるすべての志向的形成のための前提をなす感覚的ヒュレーとしての所与に差し向けられているとするならば、そのような所与に基づいてわれわれが意識する自然のうちには、その自然を完全に精神の形成体として捉えることを不可能にする、或る残余が残ることになる<sup>29)</sup>。

ラントグレーベは、このような撞着が生じたのは、フッサールが『イデー II』の最終考察において与えられたものとそれに対応する意識との相関関係という方法的概念から、構成への形而上学的概念へ移行していることに原因があると見る。この移行と共に、すべての存在は必然的に意識にとっての存在であるという思想は、すべての存在は意識による存在、意識によって措定されたものであるという思想になり、しかもその意識は、われわれが反省する自我としてみずからを意識できるがままの形で、絶対的存在、絶対的領域になるのである。こうしてフッサールはすべての存在を構成する意識としての精神から、存在の諸領域を導出してみせることによってその存在の諸領域の区別を絶対的に止揚したのである<sup>29)</sup>。

ラントグレーベは、以上のような事態に陥ったのは、フッサールの反省の方法に基づく事象分析に原因があると見る。すべての意識が対象を判断しつつ措定する意識、つまり理論的に客観化する意識ではない。しかし、意識が意識として自己のうちに含むものは、意識の措定の能作への反省から取り出される。判断しつつ、措定しつつ、理論的に客観化する態度によって、意識が一般に意識として何であるかが露呈される。つまり意識が意識するものは、反省によって、つまり客観化する統覚によって明らかにされる。しかし、ラントグレーベによれば、一切の客観化的な統覚に先立って、そのキネ

ステータを伴う直観の感覚的な意識があり、そしてこのキネステータにおいては、私に対して単に事物がそのさまざまな現出の仕方において構成されるだけでなく、私が私自身を措定する自我としてだけでなく、感覚的に触発される自我として意識している。フッサールはこの事態を身体性の分析において徹底的に提示するが、すべての意識の意味は判断的-措定的な態度によって露呈されうるというフッサールの根本的な前提のために、私が感覚において意識する自然は、感覚所与に基づく客観化の成果である自然と無造作に同一視されることになる。こうして見落とされることは、自然は客観化の成果以上のものであり、一般に客観化の可能なもの以上のものであるが、また私自身についての私の直接的な意識は、単に措定作用を遂行する、措定的な精神としての私の意識であるばかりではなく、私がまさに身体的に感覚する自我である限り、それ自身においてすでに自然の意識でもある、ということである。もちろんこの意味での自然は、自然科学的に客観化される自然に帰一するものではない。この自然は何らかの構造をもっており、それらの構造は感覚する身体の構造に相関的であり、この身体性において開示され、また客観化のあらゆる努力に先立って、私がつねに私の世界のうちにある、そのあり方を構成している<sup>26)</sup>。

ラントグレーベは、世界の構成は客観化的-措定的な純粹自我との相関においては解明されえず、むしろその際、考慮すべき相関は、自己自身を単に思考する自我としてではなく、「感覚し-気分づけられている自我」(empfindend-gestimmtes Ich)として意識している、まったく具体的に理解された感覚する自我との相関でなければならない、と述べる。フッサールにおいては、このような問題設定は、人格主義的な態度において示唆されるにとどまった<sup>27)</sup>。

ラントグレーベの指摘からわかるように、精神に根源的に相関するのは客観化された自然ではない。私が感覚において意識する自然は感覚所与に基づく客観化の成果以上のものである。精神である私は身体的に感覚する自我であり、自然は私の身体性において感じられる。ラントグレーベが述べる「感覚し-気分づけられた自我」が具体的に理解された自我であり、人格である。『イデーⅡ』での人格(精神)の身体性や感情の分析はさらに豊かに展開されることができよう。メルロー・ポンティやヘルマン・シュミッツはこの方向を推し進めたと言えるであろう。

### 終わりに

われわれは周囲世界の自我としての人格を、精神と自然の関わりで重層構造をもつものとして解釈した。人格(精神)は自然の基盤としての心と身体に依存しているが、衝動や感情は単に人格の低次の層に属するのではなく、高次の精神活動の中にも及んでいる。この人格の具体相の分析は『イデーⅡ』の「精神世界の構成」ではまだ十分に行われなかった。それは後期の『危機』での「生活世界」の問題につながるであろう。『イデーⅡ』の第三篇「精神世界の構成」は、ゾンマーによれば、「生活世界の最初の現象学」と言うべきものを含んでいる。この第三篇の中で述べられる「精神的世界」、「人格的世界」あるいは「コミュニケーション的世界」といった概念は、後に『危機』で「生活世界」あるいは「生活周囲世界」と呼ばれるものと一致する<sup>28)</sup>。人格の問題は生活世界や「自然と精神」さらには歴史という互いに関連し合う問題群の中でさらに深められて分析される問題であろう。

『イデーニ II』は、その元になった草稿が何度も書き直され、結局は出版されなかった事情からわかるように、未完成の著作である。したがって、多くの問題を孕んでおり、整合的に解釈することがきわめて難しい。ここには多くの問題が萌芽的な状態で、放置されている。われわれは『イデーニ II』本文での人格の構成の一つの解釈を示したにすぎない。『イデーニ II』に付論として収められた関連草稿や 1927 年の「自然と精神」に関わる講義などは今回まったく扱うことができなかった。それらの草稿の検討を含めた考察は別の機会を待ちたい。

## 注

- 1) ロータッカーの「人格の成層論」は人格を重層構造をもつものとして考えるヒントを与えてくれる。ロータッカーは人格に、下方に「自己、エス、深層人」という非-自我の諸中枢、上方に自我を区別している。この重層構造によって、人格の多様な活動の研究が可能になる。ただし、ロータッカーの「人格の成層論」は、人格の核に深層人という生命や心情につながる層を置いている点で、純粋自我を人格の核に据えるフッサールの人格論とは異なる。Erich Rothacker, *Die Schichten der Persönlichkeit*. Leipzig 1941. エーリヒ・ロータッカー、北村晴朗監訳/大久保・石川・針生訳『人格の成層論』、法政大学出版局、1995 年。
- 2) Vgl. Marly Biemel, Einleitung der Herausgebers zu „*Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch*“. Husserliana Band IV, Haag 1952, S. XIII, XV. 以下、『イデーニ I』、『イデーニ II』のページ数は、本文中にフッサリアーナの巻数とページ数を記す。
- 3) Vgl. Ludwig Landgrebe, Seinsregionen und regionale Ontologien in Husserls Phänomenologie, in: *Der Weg der Phänomenologie*, Gütersloh 1963, S.148. ラントグレーベ「フッサールの現象学における存在の諸領域と領域的存在論」、L. ラントグレーベ、山崎庸佑・甲斐博見・高橋正和訳『現象学の道—根源的経験の問題』、木鐸社、1980 年、239-240 頁。
- 4) Manfred Sommer, *Lebenswelt und Zeitbewußtsein*. Frankfurt a. M. 1990, S.73-76. 心と精神の関係について、自然が<物理的-物質的な自然>と<心的-有心的自然>に分かれるかどうか、また心的なものが<自然的-有心的なもの>と<精神的-人格的なもの>に分解するかどうか、ということはレットテルを貼る問いであって、フッサールはこのような問いにはそれ以上関わり合わなかった、とゾンマーは述べている。
- 5) L. Landgrebe, a.a.O., S.156. 邦訳 253 頁。
- 6) L. Landgrebe, a.a.O., S.149-150, 153, 158. 邦訳 241、243-244、248、256 頁。
- 7) Held, Klaus, Einleitung zu „Edmund Husserl, *Phänomenologie der Lebenswelt. Ausgewählte Texte II*“, herausgegeben von Klaus Held, Stuttgart 1986, S.9. クラウス・ヘルト、浜渦辰二訳『20 世紀の扉を開いた哲学—フッサール現象学入門』、九州大学出版会、2000 年、68 頁。
- 8) Bernhard Rang, *Kausalität und Motivation. Untersuchungen zum Verhältnis von Perspektivität und Objektivität in der Phänomenologie Edmund Husserls*, Haag 1973, S.115.
- 9) Vgl. M. Sommer, a.a.O., S.83.
- 10) B. Rang, a.a.O., S.66.
- 11) 新田義弘『現象学とは何か』、紀伊國屋書店、1968 年、127 頁。
- 12) B. Rang, a.a.O., S.86.



- 13) ラントグレーベによれば、人格主義的態度の優位は、本来まず「方法的に選択された態度」ではなく、「われわれが直接われわれ自身とわれわれの世界を意識するあり方」である、という点にある。さらにラントグレーベはより積極的に、自然主義的態度に対する人格主義的態度の優位の立証において、人格主義的態度がもともと態度ではなく、世界を直接に所有するあり方である、とも述べている。L.Landgrebe, a.a.O., S.155, 160-161. 邦訳 252、260 頁。
- 14) ただし、フッサールは「自然的態度」を「自然主義的態度」と区別しない場合も多い。
- 15) M. Sommer, a.a.O., S.83. ラングによれば、自然的態度は、自然科学と精神科学の近代的二元論に本質的に対応する、自然界に向かう-自然主義的態度と人格的-人格主義的態度の二つの変換を歩み抜くことができる。Vgl. B.Rang, a.a.O., S.66.
- 16) Marx, Werner, *Die Phänomenologie Edmund Husserls*, München 1987, S.76. ヴェルナー・マルクス、佐藤真理人・田口茂訳『フッサール現象学入門』、文化書房博文社、1994 年、116 頁。
- 17) B.Rang, a.a.O., S.125-126.
- 18) A.a.O, S.131.
- 19) 『イデーⅡ』での感情移入は、他者経験を可能にする超越論的次元での感情移入ではなく、われわれが互いに人格であることを認め合う経験的次元での感情移入である。
- 20) アルフレッド・シュッツは、「人格の間の実際のあるいは可能なコミュニケーションは、はじめから自明なもののみなされていて、社会性はコミュニケーション的行為によって構成されるものと定義されている」と述べ、フッサールの『イデーⅡ』での人格の社会性の構成に不満を述べている。Alfred Schutz, *Collected Papers III. Studies in Phenomenological Philosophy*. The Hague, 1975, p.38. I.シュッツ編、渡辺・那須・西原訳『アルフレッド・シュッツ著作集、第4巻、現象学的哲学の研究』、マルジュ社、1998 年、83 頁。
- 21) この箇所についてはシュッツの解釈に従った。A.Schutz, *ibid.*, p.33. 邦訳、76 頁。ここには本来、善と悪や自由意志に関わる人間の本性を巡るいっそう深い倫理的考察が必要になるが、これにはフッサールはまったく触れていない。
- 22) ここには感情移入がはたらいて、私は(他者の)物体を身体として統握することになる。感情移入については本論文の 44 頁以下を参照。
- 23) M.Sommer,a.a.O., S.78.
- 24) L.Landgrebe, a.a.O., S.158. 邦訳 256-257 頁。
- 25) A.a.O., S.157-158. 邦訳 255-256 頁。
- 26) A.a.O., S.159-160. 邦訳 258-260 頁。
- 27) A.a.O., S.160-161. 邦訳 260-261 頁。
- 28) M.Sommer, a.a.O.,S.59.